

## 2 確かな学力の育成

取組の  
方向性

- これからの社会で活躍するために必要な資質・能力の育成
- 児童生徒の実態に応じた授業改善の推進と家庭学習の充実
- 社会ニーズに対応した学習内容の充実などによる生徒の進路実現の推進

### 確かな学力育成プロジェクト

学習指導要領の趣旨を生かし、すべての小・中学校が「学校の組織的な取組を土台とした全県共通取組」に取り組む。

#### 目標 つまずきを生かした児童生徒一人ひとりの資質・能力の向上

日々の授業や諸調査から明らかになった児童生徒の「つまずき」に着目し、児童生徒の学習改善や教師の指導改善に生かすことを通して、児童生徒一人ひとりの資質・能力の向上を図る。

「確かな学力育成プロジェクト」概念図



#### 学校の組織的な取組を推進するために

- 校長のリーダーシップの下で、校内の運営体制を構築し、学校が設定した具体的な目標の達成に向けて主任層が効果的に機能・連携しながら全職員で継続的に検証改善に取り組むことが重要。
- 資質・能力の育成に向けて、カリキュラム・マネジメントを確立して教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図る取組をもとに、教育課程の改善を図ること。
- 自校が策定する「確かな学力育成プラン」において、成果指標を具体的に設定し、「資質・能力の育成に向けた、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に係る一連の取組を検証すること。また、プランをもとに設定した、検証対象の「指導上の課題」については、教育課程の見直しを図り、全学年・全教科の指導において課題解決を図ること。
- 「新たな教師の学びの姿」や「教員等育成指標」に記載の事項を踏まえ、「教員の授業力向上」に係る取組を進めること。
- より一層の質的改善に向けて、指導主事による助言を必要とする場合は、市町村教育委員会担当者を通じて相談すること。

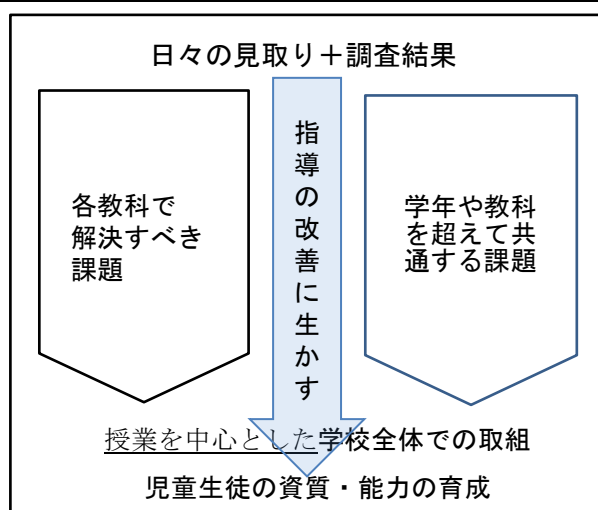
## ■ 諸調査結果の積極的活用による検証改善サイクルの構築と確立

### < 具体的取組 >

- 自校の「確かな学力育成プラン」に基づいて、主任層が中心となり、年間を通した複数回の CAPD サイクルを生かし、資質・能力の育成を図る。
- プランをもとに諸調査結果を活用し、学年や教科を超えた課題を洗い出し、全教職員で課題解決を図る。
- 各教科等で解決すべき課題について、教科担当を中心に校種や学年を超えた学習内容等の系統性を踏まえた課題解決を図る。そのため、育成された「資質・能力」を使って「内容」を深める指導を効果的に行うこと。

### 【取組のポイント】 調査結果活用の2つのアプローチ

諸調査は一部の学年や教科に限られています。調査結果を分析する際には、「各教科で解決すべき課題」と「学年や教科を超えて共通する課題」の2つの側面から課題を洗い出します。「各教科で解決すべき課題」とは、例えば、算数の「基準量と小数倍から比較量を求めることができる」、数学の「関数の意味を理解している」等の教科の専門的な課題解決が必要とされる課題です。それに対して、「学年や教科を超えて共通する課題」は、「（指示にしたがって）文章を書くこと」や「（理由を）説明すること」等の課題であり、教育課程全体で学年や教科を超えて解決を目指すべき課題です。学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）の育成も学年や教科を超えた課題として捉えることができます。



### 【参考①】「確かな学力育成プラン」に基づいた検証改善サイクル確立のためのポイント

チェック欄

C	調査結果の分析から学年や教科を超えた児童生徒の課題を洗い出している。	
	検証可能で明確な「学校全体で重点的に育成を目指す資質・能力」を設定し、全教職員で共有している。	
A	全県共通取組を学校の実態に合わせ、手立てとして取り組んでいる。	
P	全教職員が主体的に参画できるよう、校内の運営体制を確立している。	
	年間に複数回 CAPD サイクルが回るよう計画している。	
D	設定した資質・能力の育成に向けて、全教職員が授業を中心に取り組んでいる。	
C	児童生徒の変容と教職員の取組の両面から捉えて評価している。	

### 【参考②】 県学習定着度状況調査結果から

学校質問調査 質問項目（積極肯定回答）	小学校	中学校
年間に複数回 CAPD サイクルが回るように計画していますか。	R5 56.1% R6 58.3%	R5 42.8% R6 36.8%
設定した資質・能力の育成に向けて全教職員が授業を中心に取り組んでいますか。	R5 64.7% R6 63.5%	R5 53.8% R6 50.7%
諸調査の結果から、基礎的・基本的な内容の定着に課題がある場合には、確実な定着を図るための取組を行っていますか。	R5 56.5% R6 57.9%	R5 35.9% R6 31.9%

- ・ 教科全体の平均正答率の増減にとらわれず、小問ごとの結果を踏まえ、今後の指導上の課題となる「内容」や「資質・能力」を洗い出し、全学年・全教科の指導計画の改善に生かす取組の加速化が必要。
- ・ 無解答率の高い小問については、学習指導要領が育成を目指す「思考力、判断力、表現力等」を意識した授業実践の充実が急務。「授業（実践）アイデア例」等を効果的に活用したい。

## ■ 主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究の活性化

### < 具体的取組 >

- 資質・能力の育成に向け「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何が身に付いたか」等の視点を踏まえ、目標や指導事項等を明確にし授業を実践する。
- 研究協議では、単元等を通じて児童生徒に身に付けさせたい資質・能力が身に付いたか、課題は何かを検証し、教育課程を軸に「教科教育等の専門性」について共通理解を図る。  
また、各教科等の「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点からの授業改善について学び合う場を設定する。 ※P13【参考④】【参考⑤】を参照。
- 授業研究会や互見授業の目的、授業を見る視点等を校内で共有し、授業づくりについて校内の人材を積極的に活用しながら学年や教科を超えて教師同士が学び合う場を設定する。  
(例) 校内で指導助言を体験する / 授業研究会後の児童生徒の学習改善や教師の指導改善について、主任層等による支援やフィードバックを継続的に行う
- 学びのツール（ICT やオンライン）を対面の指導の中で適切に組み合わせ、児童生徒の興味・関心を喚起し、学習の効果の最大化を図る指導の在り方を検討し実践に生かす。

### 【取組のポイント】「1単位時間」から「単元や題材など内容や時間のまとまり」へ

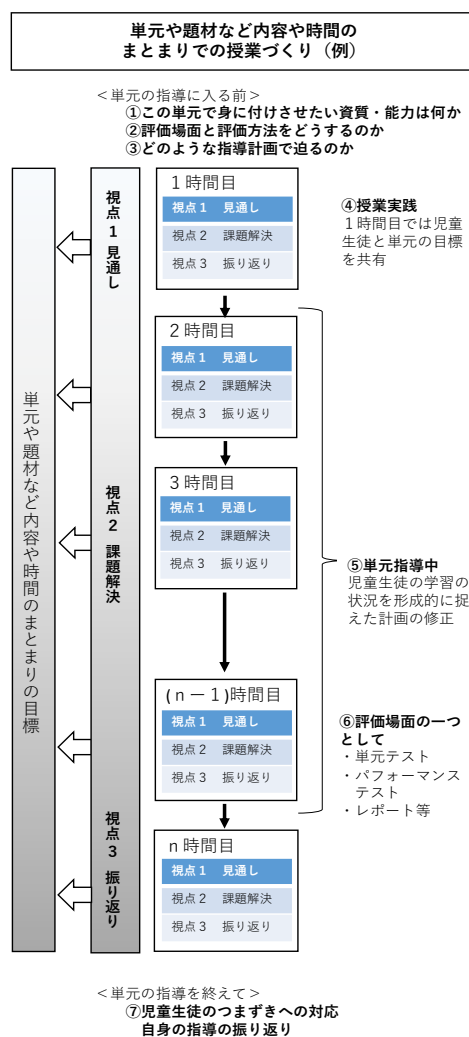
学習指導要領総則では、「各教科等の指導内容については、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、そのまとめ方や重点の置き方に適切な工夫を加え、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して資質・能力を育む効果的な指導ができるようにすること」と示されています。

また、学習評価においても「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること」とされています。

右図はその趣旨を踏まえた単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した授業づくりの構想例です。本県では、「いわての授業づくり3つの視点」が授業づくりの基本として定着してきていますが、今後は1単位時間のみならず、長期的な視点で児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にした授業を構成し、実践するとともに、指導した結果について指導と評価の一体化の視点から協議することを通して、児童生徒の資質・能力の向上を目指します。

#### 互見授業や授業研究会の視点(例)

1. 単元で身に付けさせたい資質・能力は何か
2. 1の達成に向けて、本時はどのように有効であったか
3. 1の達成に向け、本時やこの後の指導計画の改善点は何か
4. 評価方法は妥当か 等



## ■ 児童生徒の発達の段階を考慮した**家庭学習の内容の充実と習慣化**

本指針における「家庭学習」は、自宅で行う学習や読書のほか、地域の施設等を活用して行う学習や体験、子どもの発達と学びをつなぐ認知能力や非認知能力の育成の機会になり得る豊かな体験、子どもの成長に良い影響（自尊感情や外向性など）を与える自然体験や社会体験など、学校以外の学習全般を指すものです。

### <取組のポイント>

- 学習習慣の確立に向け、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりする指導の充実を図ること。
- 児童生徒一人ひとりの可能性を伸ばす観点から、家庭学習の内容については、画一的な取組に偏らないよう配慮するとともに、指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること。
- ICTの活用の在り方については、新たな学びのツールとして、校内で共通理解を図った上で、保護者の理解と協力を得ながら活用の充実を図ること。
- 生徒指導の側面から、学校外の機関や自宅等での学習の取組状況を把握し、努力を積極的に評価すること。
- 基礎的・基本的な内容の定着に向けた学習や、自主的・自発的な学習については、自ら目標を設定し、実行し、内容や取組方法等を振り返って自己調整しようとする態度を尊重すること。

### 【参考③】家庭学習の取組に関連する県内の状況

R6 県学調（学校質問調査）結果から

学校の宿題などに加え、補充のための学習や発展的な問題に、児童生徒が自ら取り組める工夫をしていますか。

	小学校		中学校	
工夫している	74	27.8%	29	20.1%
どちらかといえば工夫している	162	60.9%	89	61.8%
あまり工夫していない	29	10.9%	26	18.1%
工夫していない	1	0.4%	0	0.0%

(小) 家庭学習の取り組み方や内容等について、校内の共通理解の下で指導していますか。

(中) 生徒一人一人に合った学習計画の立て方や内容について、家庭学習の取組を振り返らせる指導をしていますか。

	小学校		中学校	
行っている	181	68.0%	39	27.1%
どちらかといえば行っている	81	30.5%	74	51.4%
あまり行っていない	4	1.5%	30	20.8%
行っていない	0	0.0%	1	0.7%

諸調査の結果から、基礎的・基本的な内容の定着に課題がある場合には、**確実な定着を図るための取組**を行っていますか。 ※ただし、授業において定着を図ることが土台であることに留意すること。

	小学校		中学校	
行っている	154	57.9%	46	31.9%
どちらかといえば行っている	110	41.4%	96	66.7%
あまり行っていない	2	0.8%	2	1.4%
行っていない	0	0.0%	0	0.0%

授業で行う振り返りは、児童生徒自身が学習の成果（又は課題）を実感できる振り返りとなっていますか。

	小学校		中学校	
なっている	108	40.6%	47	32.6%
どちらかといえばなっている	155	58.3%	96	66.7%
あまりなっていない	3	1.1%	1	0.7%
なっていない	0	0.0%	0	0.0%



## ■ 学習の基盤となる言語能力の育成

### <取組のポイント>

- 教育課程全体で言語活動を充実させるとともに、育成された言語能力を基盤として、関連する「資質・能力」を使って、各教科等の特性を生かし「内容」を深める指導の充実を図ること。
- 「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関連の指導事項等を踏まえて、各教科等で効果的に指導に生かすこと。
- 授業においては、各教科等の指導のねらいを明確にした上で、言語活動を適切に位置付けること。また、過去の諸調査結果により得られた指導上の課題を、今後の授業改善のための手がかりとして生かし、全学年・全教科の指導計画に適切に位置付けること。
- 本県において課題となっている「話すこと」「書くこと」については、引き続き、小問ごとに背景となる要因を分析・検証すること。また、それらを踏まえ、単元等の指導計画に位置付け指導を充実させた上で、関連する過去の調査問題（小問）を評価問題（成果指標）として検証に活用することは、検証を効果的に進める手段として有効であると考えられること。
- 幼小中高といった異校種間の連携の視点とすること。

### 【参考④】 学習・指導の改善充実や教育環境の充実等（国語） H28.12.21 答申資料より抜粋

#### i) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

- 国語教育の改善・充実を図るためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、後述するアクティブ・ラーニングの三つの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。このため、国語科におけるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善とは、アクティブ・ラーニングの視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると言える。

#### （「主体的な学び」の視点）

- ・「主体的な学び」の実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。

#### （「対話的な学び」の視点）

- ・「対話的な学び」の実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けることなどが考えられる。

#### （「深い学び」の視点）

- ・「深い学び」の実現に向けて、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。

### 【参考⑤】 各教科等における「主体的な学び」の視点、「対話的な学び」の視点、「深い学び」の視点

授業改善の各視点については、教育課程を軸に授業研究を効果的に進める上で、教科等横断的な理解が必要。教科ごとに表記は異なるため、以下の資料を参照すること。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）平成28年12月21日」及び「別添資料」「補足資料」

